

背景

主題

双子の絆、アイデンティティ、夫婦・親子の関係、喪失

舞台

港市エフェソス

材源

1390年 ジョン・ガワーにより英訳された古代ギリシャのロマンス『ティルスのアポロニウス』をもとに、イジーオンとエミリアの物語の枠がつけられた。

1595年 ローマの劇作家プラウトゥスの『メナエクス兄弟』が英訳出版された。第2作目の『アンフィトルオ』の影響も第3幕第1場に見てとれる。

上演史

1594年 ロンドンのグレイズ・イン法学院にて上演。

1786年 オペラ『Gli Equivoci (誤解)』がウィーンで上演される。

1938年 リチャード・ロジャースとロレンツ・ハートが、ニューヨークのブロードウェイでミュージカル『ボーイズ・フロム・シラキューズ』を上演。

1938年 ストラットフォード・アポン・エイヴオンでのシオドア・コミッサルジェフスキーの演出が舞台空間を流動的に使い、シェイクスピア劇の演出に重要な影響を与えた。

1963~97年 インドの映画会社が本作品をもとに5本の映画を制作。そのうちの最新作はラメッシュ・アラウンド主演の『ウルタ・パルタ』。

1976年 ロイヤル・シェイクスピア劇団のトレヴァー・ナン演出の公演で、笑劇、サーカス、ミュージックホールの要素を一体化させた。

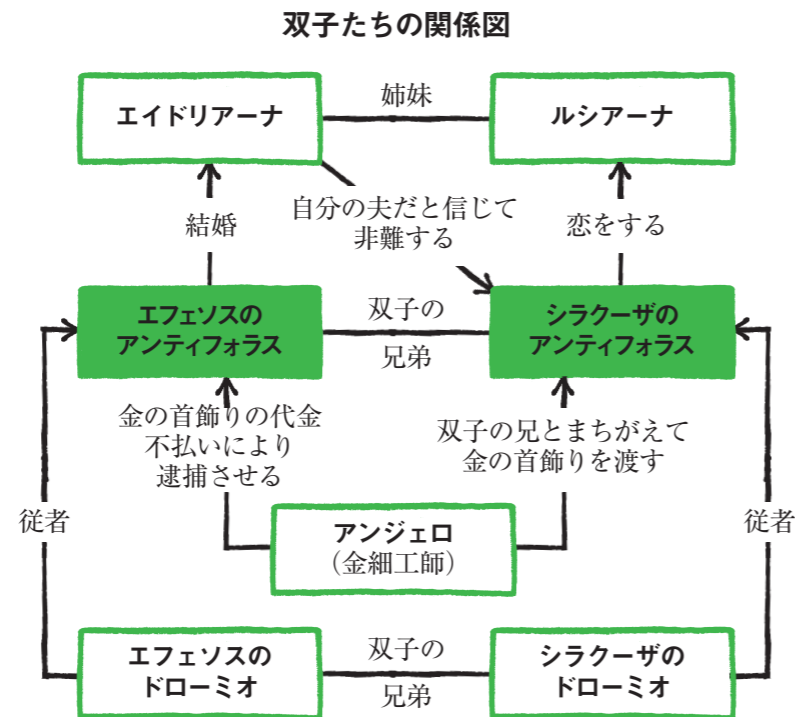
2001年 本作の日本版『まちがいの狂言』がイギリス、アメリカを巡演。

『まちがいの喜劇』の核となる混乱は、双子という自然現象が原因で引き起こされる。シェイクスピアが双子に関心を抱くのは、彼が双子の父親だからだ。人は自分が唯一無二の存在だと考えたがるものだが、一卵性双生児はアイデンティティが同じらしく、興味深い。双子ならひとりの人間が同時に2か所に存在しうる。それは滑稽でもあるが恐ろしくもある。

シェイクスピアは喜劇と恐怖の両方を描く。プラウトゥスの『メナエクス兄弟』の双子に従者のドロミーオ兄弟を加え、一卵性双生児を2組にしている。こうして、すれちがいのテンポも増して、笑劇になっていく。双子の従者は生まれたときから主人たちと人生をともにしているわけで、数々のまちがいが起き始めたとき、単に主従関係が喜劇的に破綻するだけではなく、長きに亘る友情と信頼の絆もまたはっきり危機にさらされる。

アイデンティティの探究

シェイクスピアは材源を書き換えて、アイデンティティがどれほど他者の影響を受けるかを探求していく。双子のそれぞれが自分の経験を自分の従者にさえ否定されるときに感じる恐怖や孤立感が示される。それぞれ、少しずつ異なる世界を見聞きしているらしい。人違いをされて、シラクーザのアンティフォラスは町を離れたい。それというのも、彼が経験するちぐはぐな出来事が、この町に魔法がかけられているという評判を裏付けているように見えるからだ。また、この混乱のせいで兄のほうはいら立ちを募らせ、とりわけ正気を疑われると粗暴に振る舞うようになる。するとますます、頭がおかしくなったと思われる。このようにアイデンティティや人と人との信頼の絆が脅かされると、家族だとか社会の人間関係といったものはあつという間に崩壊することが明らかになる。



“ 私は広い世界のなかで、
大海の一滴だ。
海のなかでもう一滴を
見つけようとするが、
仲間を探そうとして
海に落ちると見えなくなり、
知りたいともがうちに
自分が消えてしまう。
シラクーザのアンティフォラス
第1幕第2場 ”

劇の構造

イジーオンの悲劇の物語がこの喜劇の枠組みを作り上げており、この老人が身代金を得るために与えられた執行猶予の1日がこの劇の長さだ。尼僧院長が行方不明の妻エミリアとわかるエンディングは、驚きだ。何のヒントもなかったからだ。エミリアが妻とわかると、突きつけられていた死の恐怖から陽気な復活へ、雰囲気さがらりと変化する。家族が再び全員そろろう。そして、家族それぞれの物語もみなひとつとなるのだ。

この枠組みとなる物語のなかでは、時間はさまようように流れている。出来事の順序がめちゃくちゃになり、観客だけが物語の流れを追うことができる。ほとんどそっくりな場面が繰り返されて滑稽さが増幅する。そういう場面のなかで、主人と従者は丁々発止の漫才風な掛け合いで勢いをつける。口論するときさえ主従のあいだにはしっかりとした絆がある。会話のテンポは相当速くておかしなもので、止まって考えている余裕はない。そんな人がいたらまちがいの起こる理由

が明らかになってしまう。

ルシアーナとシラクーザのアンティフォラスの恋物語は混沌としたなかでのちょっとした息抜きになり、アイデンティティのテーマの変形にもなっている。周囲の怒りと対照的に優しいアンティフォラスは、聞いたこともない抒情詩的な言葉で、驚くルシアーナに求婚するのだ。

結婚の絆

結婚も、双子の一種と考えることができる。シェイクスピアはエフェソスのアンティフォラスの妻エイドリアーナという人物を作ることで、結婚の責任と苦勞とに注意をひきつける。エフェソスは新約聖書ではエベソと呼ばれ、当時の観客はパウロが書いた「エベソ人への手紙」を知っているはずであり、そこでは夫と妻、主と僕の義務が語られていた。エイドリアーナの妹ルシアーナが熟知していたのは、まさにこれである。

エイドリアーナは公平な関係を強く望み、そう訴えたが、訴えた相手は双子の弟のほうだった。おそらく実の夫ならそう辛抱強く聞いてはいなかっただろう。尼僧院長が述べるように、もし夫への批判が過ぎたなら愛する夫に伴うすべてを失いかねない。

この劇で鍵となる小道具であり、絆を暗示する金の首飾りと縄が、愛と信頼、罰と支配の象徴として巧みに使われている。金の首飾りは夫の愛を表現していたが、夫は腹いせにこれを情婦に与える約束をする。この首飾りは双子のまちがったほうに渡り、代金不払いで兄が逮捕されてしまう。首飾りはやがて本来のアンティフォラスの手に戻り、エイドリアーナの胸元を飾ることだろう。

最後につながる絆は兄弟として再会したドロミーオたちであり、この双子も手に手を取って相等しい者として、客席からの拍手のなかを去っていく。■



2001年グローブ座公演

まちがいの狂言

2001年日本の「万作の会」が日本語公演『まちがいの狂言』を英語圏の観客に向けて上演した(野村萬齋演出・出演)。「狂った言葉」という文字で表される「狂言」は、世俗的な喜劇スタイルで知られる日本の伝統芸能だ。そこにシェイクスピアの笑劇がびたりとはまり、言葉の壁は障害にならないことを示した。

大事な場面では観客も「ややこしや!」の掛け声を口ずさんで喜劇に参加したくなる公演だ。狂言と縁の深い能の伝統を守り、アンティフォラスとドロミーオの双子たちはそっくりの面をつける。この劇の視覚的な複雑さを生かす小道具だ。

この公演の成功は、夫婦関係、喪失、アイデンティティといった本劇のテーマが強力で世界共通なものであるため、最も難しい言葉や文化の違いさえ超越することを表している。

(訳注:最後に双子が出会う場面ですっくりの面をつけるが、それまでは面をつけない直面(ひためん)と面とを使い分けた。エフェソスの人たちのところへシラクーザの者が登場するなど、二つの世界がぶつかるときに、新たに登場する者は面をつけるという規則性を設けた。)